

消化管癌におけるp53異常および遺伝子不安定性に関する研究

当研究は消化器・総合外科において食道癌、胃癌、大腸癌を切除した方を対象に研究させていただきます。

【はじめに】

食道癌、胃癌、大腸癌などの消化管癌がどのように発生して大きくなっていくのか、そのメカニズムは依然としてわかっておらず、癌の予防や治療方針を考える際には、そのメカニズムの解明が重要と思われます。p53という癌を抑制することに働く遺伝子は、消化管癌において高頻度に遺伝子や蛋白の異常を認めており、癌の発生や発育に関与すると言われています。

また、“遺伝子や染色体の不安定さ”も多くの消化管癌において観察されますが、癌の発生や発育においてどのように関与するかは明らかではありません。また、p53遺伝子異常との関係も今のところはっきりわかっていません。

【研究内容】

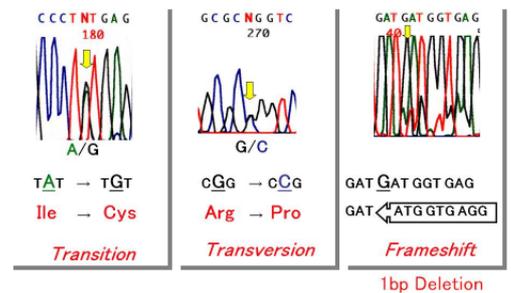
手術により切除された組織や癌細胞株を利用してp53遺伝子の配列を調べます。

この方法により、消化管癌におけるp53遺伝子異常の特徴がわかります。また、p53遺伝子を含む比較的広い領域の異常を解析する手法もあります。

p53遺伝子からはp53蛋白が作り出されますが、癌組織や癌細胞における蛋白レベルの異常もp53に対する抗体を用いることで検索します。

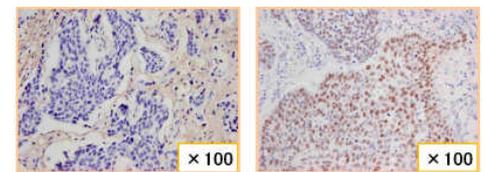
“遺伝子や染色体の不安定さ”を解析する高精度な実験方法が開発されており、消化管癌においてもさまざまなタイプの異常が存在することがわかってきました。癌組織や癌細胞を用いて詳細に解析することにより、消化管癌の成り立ちや成長する過程においてp53遺伝子異常や“遺伝子や染色体の不安定さ”がどのように関わっているかが解析できます。

p53遺伝子変異解析



免疫組織化学染色

抗p53抗体 (DO-7) を用いた免疫組織化学染色法 (SAB法)



癌細胞の10%以上が染色される症例を陽性とする。

Saeki H et al. *Br J Cancer* 2000
Saeki H et al. *Oncology* 2002

【患者さんの個人情報の管理について】

本研究の実施過程及びその結果の公表(学会や論文等)の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

もし対象者となることを希望されない方は、下記連絡先までご連絡下さい。

【研究期間】

研究を行う期間は、承認日より平成24年(2012年)3月31日まで

【医学上の貢献】

食道癌、胃癌、大腸癌の間で、癌抑制遺伝子p53の遺伝子異常・蛋白異常、あるいは遺伝子や染色体の不安定性などの結果に差があり、それぞれの発癌の危険因子や抗癌剤の効き方との間に関係があることが予測されます。

それぞれの臓器において詳しく特徴を調べることで、将来的には癌の予防や治療に役立つことが期待されます。

【研究機関・組織】

九州大学大学院 消化器・総合外科(第二外科)

教授:前原 喜彦(責任者)、准教授:掛地 吉弘、講師:森田 勝、助教:佐伯 浩司

連絡先: 〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel 092-642-5466

担当者: 佐伯 浩司